

専門教育における留学生の口頭発表(1)指導について

三浦香苗・島弘子・古本裕子・早川幸子

- I はじめに
 - II 本稿の目的
 - III 調査の方法
 - 1. パイロット調査
 - 2. 全学向けアンケート調査
 - 3. 今回の論文で扱う範囲
 - 4. アンケート対象、回収率
 - IV 結果と考察
 - 1. 指導教官から見た留学生の問題点 (質問 19)
 - 2. テーマ, 資料収集, 原稿や図表書きは, 誰の裁量で行うか (質問 7)
 - 3. 留学生への指導 (質問 18)
 - 4. リハーサル (質問 14)
 - 5. 専門教官以外の者の協力 (質問 21)
 - 6. 発表に使われる視覚資料 (質問 13)
 - 7. 視覚資料の提示の仕方 (質問 17)
 - 8. 指導教官自身の外国語による発表経験 (質問 20)
 - 9. 外国語発表と「指導」の関係
 - V まとめと今後の課題
- 添付資料: アンケート用紙

I はじめに

金沢大学留学生センターの大学院予備教育日本語研修コースでは, 一般的な初級日本語の授業のほかに専門を意識した「初級段階から始める口頭発表プロジェクト」を行っており, 成果を上げてきた(三浦・深澤・岡沢 1997, 三浦・深澤 1998, 三浦 1998)。このプロジェクトの改善のため, および専門過程での口頭発表指導用マニュアル作成の可能性を探るために, 1998年夏に金沢大学全学の留学生の指導教官(194名)を対象に実態アンケート調査を行った¹⁾。

アンケートは主として, 指導教官の口頭発表指導の実態, 留学生の発表言語の実態を聞く設問の他に, 口頭発表の理想像, 日本語教師の介入の可能性を聞く設問から構成されている。その中で, 本稿は指導教官の指導面を中心に分析を行う。発表言語については古本他(1999)にまとめた。その他については順次分析していく予定である。

留学生の専門教育の場での日本語使用の実態を調査した報告は, 仁科(1991), 庄司

(1994)、尾崎(1994, 1996, 1998)、越前谷(1996)などがあるが、口頭発表という側面に焦点を当てた調査は少ない。また、口頭発表の方法を教える留学生向けの教科書も、産能短大(1990, 1996)、東海大学(1995)などがあるものの、専門過程での口頭発表の方法に焦点を当てた留学生向けの解説書は見当たらない。このような状況の中で、留学生の口頭発表の実態と望ましい姿を明らかにすることは、日本語教育を行う上で必要なことと考える。

II 本稿の目的

本稿では、次の諸点を検討することによって、留学生に対する口頭発表指導の実態を明らかにする。

- ・留学生の口頭発表を指導する際、指導教官は何か留学生の問題だと認識しているか。
- ・テーマ決定、資料探し、原稿／図表作成は誰の裁量で行うか。
- ・指導教官が特に留学生に気を付けて指導している点は何か。
- ・発表のリハーサルは何回行われるか、何がチェックされているか。
- ・専門教官以外の者の協力が可能か、どんな協力が可能だろうか。
- ・視覚資料の作成や提示方法は指導されているか、どんな指導がされているか。
- ・指導教官自身の外国語による発表の経験は指導に影響しているか。
- ・外国語による発表に関する自由記述と指導に関する回答が呼応しているか。
- ・上記の結果は文系・理系で差があるか、学部間で差があるか。

III 調査の方法

1. パイロット調査

全学向けのアンケート調査に先立ち、98年6月にインタビュー形式によるパイロット調査を行った。そして、指導の理念から具体的な指導技術、指導回数に至るまで、細かく聞き取った。このインタビュー調査に協力して下さった教官8人は、5学部にまたがり、その所属は、医学部、教育学部各1人、文学部、理学部、法学部各2人である。一人当たり、30分から1時間あまりの面接の結果から、指導の実態がある程度浮き彫りにされた。得られた回答は、学部や専門領域、文系か理系か、設問などによっても大きく異なって現われた。それを検討し、全学向けのアンケートを作成した。アンケートには、指導の実態と理想、留学生と指導教官の背景的な情報についての質問を盛り込むこととした。

2. 全学向けアンケート調査

パイロット調査の後、全学向けのアンケート調査用紙(別添資料)を作成し、98年7月から8月にかけて便送し、同様の方法で回収した。

アンケートの内容は以下のものである。

- 1) 指導教官のプロフィール
- 2) 留学生による口頭発表の実態(使用する言語、発表回数など)
- 3) 口頭発表の理想像(使用言語、構成、重要項目など)
- 4) 発表の際の指導について
発表原稿、視覚資料(作り方、提示の仕方など)、練習方法・回数、話し方、発表態度、注意点、問題点、指導協力者など
- 5) その他(口頭発表用マニュアル作成のための調査項目)

設問に応じて、選択形式と自由記述形式の二種類を用意し、可能な範囲で指導教官の生の声がかみ取れるようにした。

得られたデータの比率の比較にはフィッシャーの正確確率検定法を、平均値の検定にはt検定を用いた。

3. 今回の論文で扱う範囲

調査から多くの貴重な資料が得られたが、膨大な量で、一度に全部を分析しまとめることが難しいため、何回かに分けて取り扱うことにした。

今回は、調査分析の第一部として、留学生の口頭発表の実態を、担当教官の指導の側面(本稿)と使用言語の側面(本誌掲載、古本他「専門教育における留学生の口頭発表(2) 使用言語について」)から論を進める。具体的には、上記内容の1) 2) 4) を分析対象とする。

4. アンケート対象、回収率

アンケートは、1997(平成9)年度または1998(平成10)年度に留学生を受け入れて、指導した(している)教官194人を対象に送付した。そのうち、回答を寄せてくださったのは、133人であった(回収率68.6%)。同時にその指導下にある留学生256人分の情報も得た。

学部別の内訳は、工学部、医学部からの回答数が多くなっている。(表1)

文系理系別では、文系40人、理系89人、その他4人で、理系の回答者数が文系の2倍以上となっている。そのため、全体として扱うと理系寄りの傾向が見えてくることに

なる。その点に注意して考察を行った。

なお、文系理系の別は各指導教官の申告によるもので、所属学部から推測できない。例えば、一般的には理系と思われる医学部に所属する教官の専門がすべて理系とは限らない。また、文系理系については、a.文系 b.理系 c.その他の中から、回答者本人に選択してもらったため、「その他（無記入も含む）」が少数ながら含まれ、文系理系の合計は学部別の合計とは一致しない²⁾。

表1 学部別回答数の内訳

| 学部 | 文学 | 法学 | 経済学 | 教育学 | 医学系 | 薬学 | 工学 | 理学 | 合計 |
|-----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|-----|
| 回答数 | 10 | 8 | 11 | 19 | 29 | 6 | 38 | 12 | 133 |

IV 結果と考察

1. 指導教官から見た留学生の問題点（質問 19）³⁾

留学生の口頭発表を指導する際に、指導教官が問題だと認識していることを調べるために、質問をし、選択肢から複数回答で選んでもらった。

98人から回答が得られ、回答の順位は、日本語力不足>基礎力不足>経験不足>英語力不足>統計などの知識不足/その他、であった。「留学生は日本語力が不足している」が最も多く(60人)、次点の「基礎力不足」(35人)、「口頭発表の経験不足」(34人)を大きく引き離している。日本語力不足は、文系も理系も60%以上の教官が指摘し、文系・理系の差($P > 0.05$)も学部によるばらつきも見られない。

2. テーマ、資料収集、原稿や図表書きは、誰の裁量で行うか

留学生の口頭発表の指導では、日本語力不足が最も大きな問題と認識されていることがわかったが、それに対してどのような手当てがなされているか、また口頭発表指導の上で何が重要と考えられているか見ていく。

まず、発表のテーマ決定、資料探し、原稿/図表作成に関して、日本語力不足を補うような指導がなされているかを見る。

1) テーマ決定（質問 7-1）

115人から回答があった⁴⁾。回答の順位は、全体で見ると、「相談して決める」(47人, 40.9%)、「指導教官が与える」(46人, 40.0%)、「留学生の自主性に任せる」(22人, 19.1%)の順であった。(表2)

文系・理系の別で見ると、文系は、相談>学生>教官の順で、理系は、教官>相談>学生の順である。文系と理系の中でも特に、「学生の自主性に任せる」と「教官が与える」の間で有意の差があり ($P < 0.01$)、文系は学生がテーマを決め、理系は教官が決める場合が多い。

表2 テーマの選択は誰がするか -文理別-

| | 文系 | 理系 | 全体 |
|--------------|------------|------------|-------------|
| a 学生の自主性に任せる | 14(40.0%) | 8(10.0%) | 22(19.1%) |
| b 教官が与える | 2(5.7%) | 44(55.0%) | 46(40.0%) |
| c 相談して決定 | 19(54.3%) | 28(35.0%) | 47(40.9%) |
| 回答者数 | 35(100.0%) | 80(100.0%) | 115(100.0%) |

学部別に見ても、医学系・工学部・理学部は教官がテーマを与える場合が他に比べ多いのが目立っている。教育学部は指導教官と学生が相談して決める割合が高くなっている。薬学部は相談して決める教官はいなかった。

2) 資料収集 (質問7-2)

115人から回答があり、一番多いのが「留学生と教官が共同です」(69人, 60.0%)で、「留学生がする」(43人, 37.4%)が次いだ。指導教官が資料を収集するという回答は3例ながらあった。回答の分布には文理で差があり⁵⁾ ($P < 0.01$)、文系では留学生が一人である場合が多く、理系では留学生と指導教官が共同である場合が多かった。

表3 資料の収集は誰がするか -文理別-

| | 文系 | 理系 | 全体 |
|---------------|------------|------------|-------------|
| a 留学生がする | 22(62.9%) | 21(26.2%) | 43(37.4%) |
| b 指導教官がする | 0 | 3(3.8%) | 3(2.6%) |
| c 留学生と教官が共同です | 13(37.1%) | 56(70.0%) | 69(60.0%) |
| 回答者数 | 35(100.0%) | 80(100.0%) | 115(100.0%) |

3) 原稿や図表 (質問7-3)

原稿や図表は誰が書くかという設問に対しては、留学生が書いて教官がかなり手を入

れるとした教官の割合が⁵(116回答中65人, 56.0%)一番多く、留学生が⁵一人で書くとした教官が⁵(42人, 36.2%)次いだ。指導教官が⁵下書きを書いたり(1例)、共同で書くという例(8例)は非常に少なかったが、あった。

文系理系の差は資料収集に比べると顕著ではないが⁵, 文系は留学生を書く割合が高く、理系は留学生が書いて教官が⁵手を入れる割合が高いという傾向がある。

表4 図表/原稿は誰が書くか -文理別-

| | 文系 | 理系 | 全体 |
|------------------------|------------|------------|-------------|
| a 留学生を書く | 17(50.0%) | 25(30.5%) | 42(36.2%) |
| b 指導教官が下書きを書く | 0 | 1(1.2%) | 1(0.9%) |
| c 共同で書く | 2(5.9%) | 6(7.3%) | 8(6.9%) |
| d 留学生が書いて指導教官がかなり手を入れる | 15(44.1%) | 50(61%) | 65(56.0%) |
| 回答者数 | 34(100.0%) | 82(100.0%) | 116(100.0%) |

4) テーマ・資料収集・原稿や図表書きについてのまとめ

以上から、文系・理系の一般的傾向として次のことがわかった。

- ・文系は留学生の自主性が尊重され、理系は教官の指導がかなり入る。
- ・文系は、テーマ決定の時は相談するが⁵, 資料収集を留学生が自分で行い、原稿書きは留学生が一人で書く場合と、留学生が書いて教官が⁵手を入れる場合がある。
- ・理系は教官がテーマを与えることが多く、資料の収集は留学生と教官が共同で行い、原稿や図表は留学生が書いて教官が⁵かなり手を入れる。

留学生の日本語力不足はどこで手当てされているかという疑問に対する答えの一部はここにある。すなわち、資料収集を教官と留学生が共同で行ったり、資料/原稿書きに教官の手が加えられるという点である。これは、理系(日本語力の高い者は少ない)に顕著であるが⁵, 文系(日本語力の高い者が多い)でも見られる現象である⁶⁾。

留学生の日本語力に関する詳細は、古本他(1999)IV 2. 2) a. 「留学生の日本語力の文理差」を参照されたい。

3. 留学生への指導(質問18)

特に留学生に気をつけて指導している点を聞いた。(複数回答)

114人から回答があり、「リハーサルを行う」が最も多く(66人, 57.9%), 次いで「単純明快に話すよう指導する」(56人, 49.1%), 3位は「原稿の日本語チェックを受けるように言う」(53人, 46.5%)である。

「リハーサルを行う」を多くの指導教官が選択した学部は、医学系(22人, 88.0%), 工学部(25人, 78.1%), 薬学部(7人, 61.4%)である。

文系理系の差をみると、全体で1位の「リハーサルを行う」は文理の差があり($P < 0.01$), 理系の方が多く、文系が少ない。2位の「単純明快に話すよう指導する」は理系の方が多い傾向がみられる($P=0.06$)。3位の「原稿の日本語のチェックを受けるように言う」は、文理の差はない($P > 0.05$)が、文系では1位(21人, 65.6%)である。全体で4位の「漢字の読み方の間違いを注意する」も文理の差はない($P > 0.05$)が、文系では2位(14人, 43.8%)である。

全体の順位の低いものでは、「英語の発表では日本人にわかるように易しい言葉でゆっくり話すよう指導する」が理系に多い($P < 0.05$)以外は、文理の差はみられない($P > 0.05$)。

表5 留学生に気を付けて指導している点 -文理別-

| | aリハーサル | d単純明快 | b原稿日本語チェック | g漢字読み | h発音 | c構文 | i英語 | e癖 | f母語の影響 | 合計 |
|-------------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-----|
| 文系 32人 文系での順位 | 8 25.0% | 9 28.1% | 21 65.6% | 14 43.8% | 8 25.0% | 6 18.8% | 2 6.3% | 3 9.4% | 5 15.6% | 76 |
| 理系 82人 理系での順位 | 58 70.7% | 47 57.3% | 32 39.0% | 22 26.8% | 25 30.4% | 20 24.4% | 22 26.8% | 11 13.4% | 7 8.5% | 244 |
| 全体 114人 全体での順位 | 66 57.9% | 56 49.1% | 53 46.5% | 36 31.6% | 33 28.9% | 26 22.8% | 24 21.1% | 14 12.3% | 12 10.5% | 320 |
| 文理差 フィッシャー 正確確率検定 | ** | $P=0.06$ | N.S. | N.S. | N.S. | N.S. | * | N.S. | N.S. | |

** $P < 0.01$ * $P < 0.05$ N.S.有意差なし ($P > 0.05$)

留学生への指導のまとめ

- ・理系は、リハーサルを行い、単純明快に話すよう指導する。
- ・理系でも特に医学系と工学系はリハーサル指導をする教官が多い。

・文系は、リハーサルを行うよりも原稿の日本語のチェックを受けさせる。

日本語力不足は、「原稿の日本語のチェックを受けるように言う」ことによってある程度修正されているらしいことがわかる。質問18の回答からでは、誰がチェックするのか明確にならないが、IV5.で、指導教官の他にチューター学生などの協力が得られることを述べる。

4. リハーサル

1) リハーサル回数 (質問14-1)

107人から回答があった。リハーサル回数は、5回以上を5回として計算すると、全体平均で2.28回である。文系では平均1.23回、理系では2.62回と、理系が文系の2倍強の練習回数を示し、有意に多い(t検定, $P < 0.01$)。文系は、1回が過半数を超え、3回以上は一人もいない。理系では表6が示すように、2回と3回に集中し、かつ5回以上と答えた人も14人いた。

このことから、理系では本番の発表前に、かなりの練習をさせていることがわかる。文系の練習回数の少なさに影響を与える要素としては、文系の留学生の日本語力が理系と比べて高いという指導教官側の意識(古本他1999, IV2.2) a.参照)、研究の内容の違い、発表のスタイルの違いなどが考えられるが、何が最も大きな影響を与えるのかは今回の調査からは不明である。

表6 リハーサルの回数 -文理別-

| | 0回 | 1回 | 2回 | 3回 | 4回 | 5回以上 | 合計 | 平均回数 | 標準偏差 |
|--------|----|----|----|----|----|------|-----|------|------|
| 文系 26人 | 3 | 14 | 9 | 0 | 0 | 0 | 26 | 1.23 | 0.64 |
| 理系 81人 | 1 | 17 | 24 | 23 | 2 | 14 | 81 | 2.62 | 1.37 |
| 全体107人 | 4 | 31 | 33 | 23 | 2 | 14 | 107 | 2.28 | 1.37 |

2) リハーサルでチェックする項目 (質問14-2)

リハーサルでチェックしている項目を複数回答で答えてもらった。

107人から回答があり、全体では平均4.46の項目が選ばれていた(表7)。文系では、一人平均2.96項目が、理系では4.89項目が選ばれた。また、文系では3項目選んだ人が、理系では7項目選んだ人が最多であった。これにより、理系のほうが文系より幅広く、多くチェックを入れていることが分かる。

全体的に見ると、最も多かったのは「論理の展開の仕方」で90.7%の人がチェックしている。2位「時間配分」と3位「内容に誤りがないかどうか」も70%以上の人が

チェックしている。その次は、「視覚資料の出来映え」で60%強である。それに比べると発表態度や発音は、チェックはされているが、順位は低い。

次に文理別にみても。表7が示すように、1位から3位までは、文系・理系で順位に違いはあるが、同様の項目が選択されている。また、文理差もない($P > 0.05$)。論理展開と内容の誤りは発表の質に大きく関わることであり、時間配分はどんな発表に際しても大切なことなので、この三つのチェックが多いのは当然のことと言えよう。

視覚資料について見ると、視覚資料の「出来映え」も「提示の仕方」も理系のチェックの方が多く、文系との間に有意差がある($P < 0.01$)。また、理系は「視覚資料」が4位(83人中60人)と5位(83人中54人)であるのに対し、文系の「視覚資料」は4位の「発表態度」(24人中10人)よりも少ない。これは、文系では視覚資料はさほど重要ではないが理系では重要だということを示している。理系では、OHPを中心にした視覚資料を活用しているため、その指導にも熱がはいるようだ。(本稿 IV 6.1)「卒論・修論発表と視覚資料」参照)一方、文系で使う視覚資料はレジメが大部分を占める。文系のレジメの視覚的出来映えや提示の仕方は特にチェックするほどのことでもないので、チェック率が低くなるのであろう。

順位は低いが、「発音」にも文理の差が出た($P < 0.01$)。理系にチェックが多く文系に少ない。理系の留学生の日本語力が高くないという教官の意識が作用している可能性があるだろう。

表7 リハーサルでチェックしている項目 -文理別-

| | 論理展開 | 内容の誤り | 視覚資料出来映え | 視覚資料提示方法 | 発表態度 | 発音 | 時間配分 | その他 | 合計 | 平均 | 標準偏差 |
|-------------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------|-------------------|-----------|-----|------|------|
| 文系 24人 文系での順位 | 22 91.7% 1位 | 13 54.2% 3位 | 5 20.1% 5位 | 4 16.7% 5位 | 10 41.7% 4位 | 2 8.7% | 15 62.5% 2位 | 0 | 71 | 2.96 | 1.05 |
| 理系 83人 理系での順位 | 75 90.4% 1位 | 66 79.5% 2位 | 60 72.3% 4位 | 54 65.1% 5位 | 46 55.4% | 39 47.0% | 65 78.3% 3位 | 1 1.2% | 406 | 4.89 | 1.79 |
| 全体 107人 全体での順位 | 97 90.7% 1位 | 79 73.8% 3位 | 65 60.7% | 58 54.2% | 57 53.3% | 41 38.3% | 80 74.8% 2位 | 1 0.9% | 477 | 4.46 | 1.84 |
| 文理差 フィッシャー 正確確率検定 | N.S. | N.S. | ** | ** | N.S. | ** | N.S. | | | | |

** $P < 0.01$ N.S.有意差なし ($P > 0.05$)

学部別では、「内容に誤りがあるかどうか」に学部の特徴がでていいる。この項目は、専門との関わりからか、医学系で一人を除く全員が選択していた。以下、理学部>薬学部>工学部>文学部>教育学部>経済学部>法学部の順であり、理系が上位を占めた。

3) リハーサルのまとめとして、以下のことがわかった。

- ・リハーサル回数は、理系が文系の約2倍で、理系平均は2.62回である。
- ・リハーサルでチェックする項目は、文理共に1位が「論理展開」、2位と3位がわずかな違いで「時間配分」と「内容に誤りがないか」である。
- ・理系は「視覚資料」のチェックも多く、文系との間に有意差を示す。
- ・順位は低いが「発音」のチェックは文理差があり、理系の方が多い。
- ・医学系は「内容に誤りがないか」に非常に気をつけている。

5. 専門教官以外の者の協力

1) 協力の可能性 (質問21-1)

専門教官以外の者が協力することが可能かどうかを聞いた。

112人から回答があった。協力可能と考える教官は、全体で91人(81.3%)、文系では32人(94%)、理系では59人(75.6%)であった。文理いずれも可能の方が多く、文系の方が特に多い。学部による差は特に見られず、総じて協力可能の方が多い。

2) 協力者 (質問21-2)

誰からの協力が可能かを聞いた。

協力できる人として、「院生やその他の学生」と「チューター」が同数の74人、合わせて148人であった。「日本語教師」34人、「その他」9人である。これを見ると、日本語教師よりも、留学生の最も身近にいて専門の知識のある日本人学生の協力を希望する方が多い。学部による差は特になかった。

3) 協力の種類 (質問21-3)

どんな協力が可能かを複数回答で答えてもらった。

126人から回答があった。全体的に見ると、1位「日本語の原稿を直す」59人、2位「発音を直す」51人、3位「発表に必要な日本語を教える」36人、4位は「口頭発表の一般的型」30人である。1位から3位までが日本語に関する協力で、4位が一般的型を教えること、となっている。

文理別に見てみる(表8)。理系の1位は「発音を直す」である。IV 4.2)「リハーサルでチェックする項目」で、指導教官がリハーサル時に発音のチェックをし、それは理系の特徴であることがわかったが、ここでは、協力者にも発音のチェックが期待されている。次に、1位「発音を直す」と2位「日本語の原稿を直す」は一人しか違わない点を見る。これは、理系では、日本語として誤りのない原稿を書くことと、正しく発音することが同程度期待されていることを示す。

また、理系の3位は「一般的な口頭発表の型を教える」で、文系より有意に($P < 0.05$)多い。理系の口頭発表の型は文系に較べて一定しているように筆者らには思えるが、そのことと関係があるかもしれない。

文系は、理系と1、2位の順位が入れ替わっただけのように見えるが、よく見ると、1位の「日本語の原稿を直す」は、回答した教官の61.5%が期待していて、2位の「発音を直す」(38.5%)を大きく引き離している。文系の教官がOHPやスライドを使わない分、原稿の日本語そのものについて正確さを要求しているということだろう。

表8 どんな協力が可能か - 文理別-

| | a. 一般的テーマで練習 | b. 参考文献の探し方 | c. 日本語の原稿を直す | d. 発音を直す | e. 一般的な口頭発表の型 | f. 発表に必要な日本語 |
|-------------------------|--------------|-------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 文系 39人 文系での順位 | 4 | 10 | 24 61.5% 1位 | 15 21.7% 2位 | 4 | 12 17.4% 3位 |
| 理系 87人 理系での順位 | 13 | 10 | 35 40.2% 2位 | 36 41.3% 1位 | 26 29.9% 3位 | 24 |
| 全体 126人 全体での順位 | 17 | 20 | 59 46.8% 1位 | 51 40.5% 2位 | 30 23.8% 4位 | 36 28.6% 3位 |
| 文理差 フィッシャー 正確確率検定 | N.S. | P=0.079 | N.S | N.S | * | N.S. |

* $P < 0.05$ N.S.有意差なし ($P > 0.05$)

4) 協力のまとめ

- ・ 専門教官以外の者の協力は、可能であるとする答えが全体の8割を占める。
- ・ 院生やチューターからの協力が共に可能である。
- ・ 協力の種類は「日本語の原稿を直す」が、特に文系で可能である。

- ・理系は「発音を直す」と共に「日本語の原稿を直す」が可能である。
- ・理系は「一般的な口頭発表の型を教える」も可能である。

以上、IV 2.から5.まで、専門課程において留学生に不足していると認識されている日本語力は、どのような指導により補われているか、口頭発表指導において大切なものは何かという点を見てきた。

口頭発表で最も大切なのは論理展開、時間配分、内容の正確さであって、日本語自体ではなさそうだということがわかってきた。それでも、日本語で発表する場合、内容を正しく伝えるための日本語力がなければならない。しかし、留学生は日本語力が低い者が多い。そこで、日本語の手当てをしなければならない。

手当ては様々な場合に様々な形でなされている。まず、テーマ決定・資料探し・図表や原稿書きの時に指導教官の指導が与えられ、それは特に理系に顕著である。また、文系理系ともに原稿の日本語をチェックし、理系では発音も直す。

更に、日本語の指導を補う可能性のある立場の人として、日本語教師というよりも、留学生との接触頻度の高い日本人で、専門についての知識もある大学院生などの協力が可能であるということもわかった。

6. 発表に使われる視覚資料（質問 13 - 1）

発表に使う視覚資料（レジメも含む）を、学会、卒論・修論発表、ゼミ別に、複数回答で選んでもらった。

1) 卒論、修論発表時の視覚資料

本調査のアンケートでは、学会、卒論・修論発表、ゼミという三つの口頭発表場面について調査しているが、ここでは、主として卒論・修論発表時の視覚資料を取り上げる。卒論・修論発表は、我々がターゲットとしているフォーマルなスタイルで行われる発表の場であり、学生が身近に体験する場だからである。

全体で見ると、卒論・修論発表時の視覚資料は使用度の高いものから、OHP > レジメ > スライド > コンピュータ > その他の順である。「その他」には、パネル等の回答があった。

1位と3位は文理差があった ($P < 0.05$)。1位のOHPと3位のスライドの使用は、理系が非常に多い。2位のレジメの使用は文理差がない ($P > 0.05$)。即ち、文系でも理系でもレジメが使われていることを示す。

「その他」を除いて、四つの視覚資料の使用の割合を図1に示した。図1は、四つの

視覚資料使用全体を100とした場合の各資料の割り合いを、文系・理系別にグラフにした。

文系と理系とでは傾向が異なる。文系は、使用度の高いものから、レジメ>OHP>スライド/コンピュータである。レジメの使用度が非常に高いのが特徴で、教官の86.7% (表9) が使用していて、2位のOHPを引き離している。スライドとコンピュータ使用は各々3人ずつと少ない。

理系は、使用度の高いものから、OHP>レジメ>スライド>コンピュータである。OHPの使用度が高く、教官の82.3% (表9) が使用している。レジメとスライドがそれに続き、コンピュータの利用度は低い。

表9 卒論・修論に使われる視覚資料 - 指導教官の割合 -文理別-

| | レジメ | OHP | スライド | コンピュータ |
|-------------------------|-------------------|-------------------|-------------------|------------------|
| 文系 30人 文系での順位 | 26 86.7% 1位 | 10 33.3% 2位 | 3 10% 3位 | 3 10% 3位 |
| 理系 79人 理系での順位 | 33 41.8% 2位 | 65 82.3% 1位 | 28 35.4% 3位 | 7 8.9% 4位 |
| 全体 109人 全体での順位 | 59 54.1% 2位 | 75 68.8% 1位 | 31 28.4% 3位 | 10 9.2% 4位 |
| 文理差 フィッシャー 正確確率検定 | N.S. | * | * | N.S. |

* P < 0.05 N.S.有意差なし (P > 0.05)

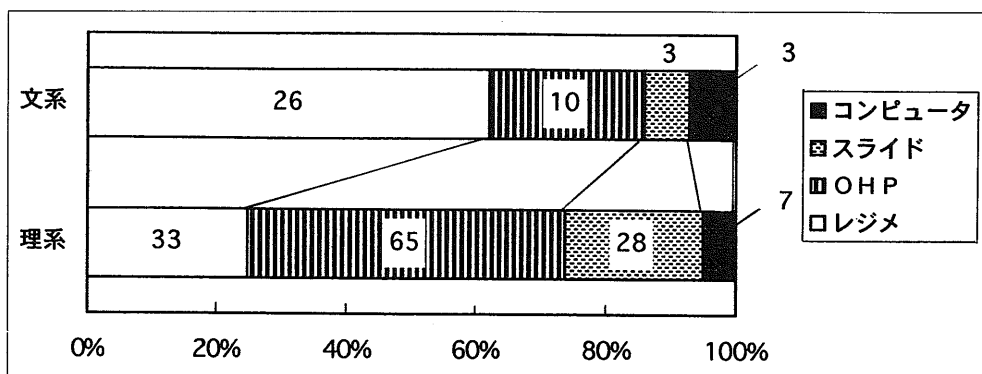


図1 卒論・修論発表時の【視覚資料】使用割合 -文理別-

以上から、文系ではレジメのような文字化した個人別プリントが重要視されるのに対し、理系はOHPやスライドのように一斉に教室で見せる映像にポイントが置かれていることがわかる。

次に、学部別に卒論・修論発表時の視覚資料使用を見る(表10)。レジメの使用が多いのは、文学部(9人中9人, 100%), 教育学部(16人中14人, 87.5%), 法学部(7人中6人, 85.7%)である。OHPの使用が多いのは、工学部(37人中37人, 100%), 薬学部(5人中5人, 100%), 理学部(91.7%)である。スライドは医学部(22人中20人, 90.9%), 薬学部(5人中4人, 80.0%)が多い。

表10 卒論, 修論発表時に使われる視覚資料 -学部別-

| | 文学 | 法学 | 経済 | 教育 | 医学系 | 薬学 | 工学 | 理学 | 合計 |
|--------|------------|------------|------------|-------------|-------------|------------|-------------|-------------|-------------|
| 回答者数 | 9人 | 7人 | 7人 | 16人 | 22人 | 5人 | 37人 | 12人 | 115人 |
| レジメ | 9 100% | 6 85.7% | 4 57.1% | 14 87.5% | 2 9.0% | 3 60.0% | 17 45.9% | 6 50.0% | 61 53.0% |
| OHP | 1 11.1% | 1 14.3% | 3 42.9% | 12 75.0% | 9 40.9% | 5 100% | 37 100% | 11 91.7% | 79 68.7% |
| スライド | 0 | 0 | 1 14.3% | 2 12.5% | 20 90.9% | 4 80.0% | 3 8.1% | 4 33.3% | 34 29.6% |
| コンピュータ | 0 | 0 | 2 28.6% | 1 6.3% | 2 9.1% | 1 20.0% | 4 10.8% | 1 8.3% | 12 10.4% |

%は、その学部で回答した教官数に対する割合

表11 視覚資料の種類 -学部別-

| | 主な視覚資料 |
|---------|--------------|
| 文学部と法学部 | レジメ |
| 経済学部 | レジメ |
| 教育学部 | レジメ、 OHP |
| 医学系 | スライド |
| 薬学部 | OHP、スライド、レジメ |
| 工学部 | OHP、 |
| 理学部 | OHP、レジメ |

表11には、各学部で主として使われる視覚資料を大まかにまとめた。(各学部の回答者数に対する割合が50%以上のもののみ取り上げた。)

2) 学会発表とゼミでの発表

次に、卒論・修論発表時以外、すなわち学会発表とゼミにおける視覚資料使用について見てみる。図2に卒論・修論発表、学会発表、ゼミでの発表、の比較を文系理系別にグラフで示した。

発表のフォーマリティーは、ゼミ<卒論・修論<学会の順で上がる。まずフォーマリティーの最も高い学会発表を卒論・修論発表と較べてみる。文系、理系共に、学会発表の傾向は、卒論・修論発表の傾向と似ているが、理系では、スライドとOHPの使用が少し増加する。

フォーマリティーの低いゼミでは、文系は、卒論や学会発表時と較べOHP使用が減った分レジメが増える程度で、あまり変らない。もともとレジメ使用率が高いからであろう。理系は、ゼミではOHPとスライドの使用が減って、その分レジメ使用が視覚資料全体127に対し58(45.7%)と、増えている。これは、卒論・修論(24.8%)、学会(18.8%)のレジメ使用率と較べると、大幅な増加である。

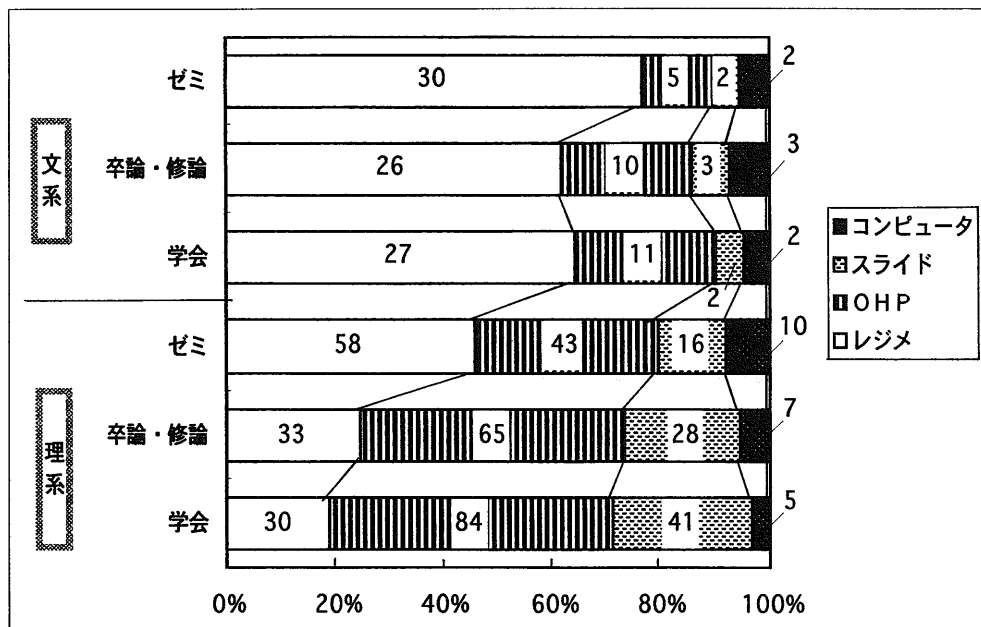


図2 学会、卒論・修論、ゼミでの【視覚資料】使用割合 -文理別-

3) 発表に使われる視覚資料のまとめ

- ・文系では、レジメ(発表の内容が文字化された、個別的に見る資料)が多く使われる。
- ・それはゼミ、卒論(修論)、学会と発表のフォーマリティーが上がっても、あまり変化がない。

- ・理系では、OHPやスライド（多くの聴衆が一斉に見る図表や写真）を多用する。
- ・理系の視覚資料使用率は、卒論・修論発表と学会発表では、あまり違いがない。
- ・理系の視覚資料使用率は、ゼミではOHPやスライドの使用が減り、レジメの使用が大幅に増える。
- ・使用される視覚資料は、学部ごとの特徴がある。

7. 視覚資料の提示の仕方（質問 17 - 1）

視覚資料の「提示の仕方」を指導しているかをたずね、106人から回答を得た⁷⁾。文理の差があり ($P < 0.05$)、文系は32人中「指導していない」(24人, 75%)が多く、理系は74人中「指導している」(52人, 70.3%)が多かった。

上記、6.で見えてきたように、理系はOHPやスライドを多用する。多用するということは、図表や写真が研究発表の大切な部分を占めるからであり、従って指導も多く与えられるのであろう。文系は主として文字化された資料(レジメ)を使うので、図表ほど指導が与えられないと推察される。

表 12 視覚資料の指導 -文理別-

| | 文系 | 理系 | 合計 |
|--------|-----------|------------|------------|
| 回答者数 | 32人 | 74人 | 106人 |
| 指導している | 8 (25.0%) | 52 (70.3%) | 60 (56.6%) |

8. 指導教官自身の外国語による発表経験の有無（質問 20 - 1）

128人から回答があった。理系では外国語による発表の経験がある教官が79人(92.9%)だが、文系では経験の有無はおおよそ半々で、あり19人(52.8%)、なし17人(47.2%)である。理系の方に外国語発表経験のある教官が多い傾向があると言えるだろう ($P=0.054$)。

学部間では(表 13)、経験ありの割合の多い順から、理学と薬学(100%) > 工学(94.4%) > 医学(89.7%) > 経済学(70%) > 法学(50%) > 文学(40%)である。

学部や専門によっては、外国語で発表しなければならないところもあるし、外国語での発表は行われなところもある。文系には日本語で行う専門が多いようである。

表 13 指導教官の外国語による発表の経験 -学部別-

| | 文学 | 法学 | 経済 | 教育 | 医学系 | 薬学 | 工学 | 理学 | 合計 |
|------|----------|----------|----------|-------------|-------------|-----------|-------------|------------|--------------|
| 回答者数 | 全10人 | 全8人 | 全10人 | 全16人 | 全29人 | 全6人 | 全36人 | 全12人 | 全128人 |
| 経験あり | 4 40% | 4 50% | 7 70% | 11 64.7% | 26 89.7% | 6 100% | 34 94.4% | 12 100% | 104 81.3% |

9. 外国語発表と「指導」の関係

指導教官自身の外国語による発表の経験が、留学生への指導のどんな点に影響するかを明らかにしようと分析を試みたが、はっきりした影響は見い出されなかった。そこで、外国語発表に関する自由記述の内容が他の質問への答と呼応している教官の例を見してみる。

1) 外国語発表への自由記述と視覚資料の指導についての呼応

質問 20-2：日本語による発表と外国語による発表はどんな点が違いますか。

質問 17-2：(17番1で視覚資料の提示の仕方を)指導していると答えた先生に伺います。どんな点を指導していますか。

上の二つの質問に自由記述で回答してもらった。

質問 20-2 に対し「言語力不足を視覚資料でカバーする」という意味の記述をした教官が6人あった。その全員が17番1で「視覚資料指導をしている」を選択している。所属学部は、工学部3人、医学部2人、薬学部1人で、理系である。この6人をA群とする。

A群6人のうち5人は、質問17番2に答えて、「視覚資料を見れば内容が理解できるような分かりやすい資料を作るよう指導している」という意味の明らかな記述をしている。(表15にコメントをそのまま記載) これをその他の記述をした教官(B群)と比較すると、表14のように違いが明らかになる。A群の83.3%が「分かりやすい資料を作るよう指導をしている」と書いているのに比べて、B群は、17.3%しか書いていない($P < 0.05$)。

表 14 「視覚資料で言葉のハンディをカバー」記述と「わかりやすい資料指導」記述の関係⁸⁾

| | わかりやすい資料指導記述あり | わかりやすい資料指導記述なし | 合計 |
|----|----------------|----------------|----------|
| A群 | 5 (83.3%) | 1 (16.7%) | 6(100%) |
| B群 | 9(17.3%) | 43(82.7%) | 52(100%) |

A群：質問20番2で「資料で言葉のハンディをカバー」と記述した教官

B群：その他の記述をした教官

これらから、「OHPやスライドを使うことによって言語のハンディキャップをカバーする」という意味の記述をした教官は、その他の教官に比べて、「視覚資料を見れば内容が理解できるような分かりやすい資料を作るよう指導している」と言える。

理系では外国語発表の機会や義務は文系より多く、研究の性格からスライドやOHPなどの視覚資料を使う率も高いので、理系の教官の方が外国語のハンディキャップをカバーするための視覚資料の使い方に熟達し、その結果「指導」も多くなるのではないだろうか。

表 15 視覚資料に関して呼応している自由記述

| 「外国語による発表が日本語による発表と違うのはどんな点ですか」への自由記述回答 | 「視覚資料はどんな点を指導しますか」への自由記述回答 |
|--|---|
| 言葉のハンディを軽くするため、ついスライドに多く書きすぎる傾向があるが、本質的には差がないはず。 | わかりやすいものにする |
| アクセント（リズム）、スピード。本来原稿を読まず、スライドに従って話した方がよいが、自信がない場合は原稿を読んだ方がいい。 | 分かりやすく、文字少なく、勿論no miss、1分間1枚 |
| 日本語より内容を3%少なくして話す（同じ時間なら）。わかってもらうようにOHPを工夫する。 | 複雑にならない。できるだけシンプルに。 |
| 基本的には発表順や強調する点は同じ。英語の場合、発音が聴衆にわからなくても、OHP等の図表だけで、理解できるよう準備すればよい。技術分野では、内容があれば、理解してもらえるものと思う。 | 研究全体がわかるような導入部のOHP（キーワード等）。研究がイメージできる観察写真など、順序よく配列する。 |
| 外国語の場合、原稿を読むと発音の問題で聞き手がほとんど理解できないことが多いので、私の場合、原稿を全く作らず、スライド、OHP画面をポインターで示しながら話す。日本語より簡潔に話すことが重要。 | 一枚の画面上の情報は必要最小限にし、見やすく、一目で理解できる表現を指導している。 |
| 細かい内容を避ける・全体の流れに気をつける・重要な点を特に強調する・OHPの使い方を工夫する | OHPの作り方* |

*このコメントは具体性がないので、「分かりやすい資料を作る指導をしている」に該当しないものとする。

2) 外国語発表への自由記述と留学生への特別指導についての呼応

1) では視覚資料の指導についての記述を扱ったため、代表的視覚資料であるOHPとスライドに関する意見だけが集まった。OHPとスライドは主に理系で使われる(IV 6. 「発表に使われる視覚資料」参照)ものであるから、理系教官からの記述しか現れなかつ

た。文系の教官の記述はどうだろうか。

そこで、「特に留学生に気をつけて指導していること」(質問18番)の選択と「日本語による発表と外国語による発表の違い」(質問20番2自由記述)について見てみると、文系教官の記述も呼応していることがわかる。

「リハーサルを行う」には3人(理系のみ)の記述が呼応した。以下、「原稿の日本語のチェックを受けるように言う」には1人(理系)、「易しい構文で話すよう指導する」には1人(文系)、「単純明快に話すように指導する」には4人(理系3人, 文系1人)、「英語の発表では日本人にわかるように易しい言葉でゆっくり話すように指導する」には1人(理系)の記述が呼応した。(表16)

表16 「特に留学生に指導している点」と「外国語発表が日本語発表と違う点」の呼応

| 特に留学生に指導している点 (選択) | 外国語発表が日本語発表と違う点 (自由記述) | 所属学部 |
|--------------------------------------|---|------|
| リハーサルを行う | 発音練習を幾度も実施する。 | 医学 |
| | * native speaker に録音してもらって、テープを聞きながら繰り返し練習する。 | 工学* |
| | 練習はかなりする。 | 工学 |
| 原稿の日本語のチェックを受けるように言う | * native speaker に文章のチェックを受ける。 | 工学* |
| 易しい構文で話すよう指導する | 単純な構文で話す。 | 文学 |
| 単純明快に話すように指導する | 細かい内容は避ける。 | 工学 |
| | 論旨が明確になるよう心掛ける。 | 文学 |
| | 簡潔に話す。 | 理学 |
| | 論理展開を単純化する。 | 理学 |
| 英語の発表では日本人にわかるように易しい言葉でゆっくり話すように指導する | 相手に理解してもらうようゆっくり話す。 | 工学 |

*は、同一人物のコメントである。

文系2人, 理系7人⁹⁾の教官の回答と記述が呼応したことになるが、この項目へのわずか9人の記述を以て指導の実態について云々するのは早計であろう。また、時間的制限や設問のまずきなどによって、記述されなかった教官も多いに違いない。

しかし、少なくとも9人の教官は、自分の外国語による発表の経験を生かして、意識

的に留学生の指導を行っていることがわかる。また、質問18の問いは、理系に片寄ってはいないので、文系教官の記述との呼応も出てきたのだと思われる。質問18への全回答者比(文系32人:理系82人)から見ると、文系2人:理系7人は、文系の割合が少ないとは言えない($P > 0.05$)。

3) 外国語による発表の経験のまとめ

- ・理系教官の90%強、文系教官の50%強が外国語による発表経験がある。
- ・外国語発表に関する自由記述で「言語力不足を視覚資料でカバーする」と述べた教官は全員理系で、分かりやすい資料を作るよう指導している。
- ・外国語発表に関する自由記述の内容と、留学生への指導点が呼応している教官は、数は少ないが、文系・理系にわたっている。

V まとめと今後の課題

本稿では、専門分野で行われている口頭発表の実態を、指導という側面から考察した。そして、次のようなことが明らかになった。

第一に、指導教官が留学生の日本語力不足を大きな問題として認識していることがわかった。

第二に、日本語力不足の手当てとして次のことが行われていることがわかった。

- ・発表のテーマ決定、資料収集、図表や原稿書きの時に指導教官の指導が入る。特に理系に顕著である。
- ・日本語の発表原稿チェックが文系、理系ともになされる。
- ・リハーサルでの発音チェックが特に理系で行われる。

第三に、指導教官以外の協力の可能性としては、日本語教師よりも専門知識のある日本人(大学院生やチューター)があげられている。そして、協力の内容として、文系は日本語原稿を直すこと、理系は発音と日本語原稿を直すことが求められている。

第四に、発表のリハーサルにおいては、日本語そのものの指導よりも、論理展開、内容の正確さ、時間配分が重視され、指導されている。

第五に、文系と理系の指導は次の点で異なる。

- ・理系はテーマの決定、資料収集、図表や原稿書きの全てにおいて、教官の指導が与えられることが多い。一方、文系は教官の指導は理系より少なく、教官は相談は受けるが留学生の自主性を尊重する傾向がある。

・文系は主として原稿の日本語をチェックし、理系は発表のリハーサル指導を多くの教官が何回も行う。

第六に、視覚資料の選択、作成、提示全ての面に、学部間の違いが顕著に見られる。

第七に、教官自身の外国語発表の経験は理系は90%強、文系は50%強であるが、それから得たものを留学生の指導に生かしている教官は、理系にも文系にも見られる。

以上、留学生の口頭発表指導について見てきた。指導の多寡、指導の内容などの差は、指導教官と留学生の個人的要素によっても出てくる。しかし、文系と理系の差、学部間の差などが数字として表れるのを見ていると、個人的な要素と共に、専門による研究の内容とスタイル、それに基づいた発表の内容とスタイルによって、留学生への指導のあり方が異なってくるらしい。

我々の最終目標は専門の口頭発表のための留学生用マニュアル作りである。今回は、アンケート調査によって得た膨大な資料の6割程度を分析して現状を把握しようとした(古本他1999の分も合わせて)。残りの部分、特に「口頭発表の理想像」の部分早速に分析し、留学生の専門分野における口頭発表にとって、何が重要な要素であるか、何が不要であるかを割り出したい。そして、留学生にとって役に立つマニュアルを作りたいと考えているが、我々の本来の守備範囲である日本語の部分、どのように、どの程度まで、展開していくかを考えなければならない。

【謝 辞】

お忙しい中をインタビューとアンケート調査に応じてくださった多数の金沢大学の留学生指導教官、アンケート項目作成や資料分析にいつも助言をいただいた留学生センターの岡沢孝雄教授に、深く感謝いたします。

【注】

- 1) この調査は、日本語研修コース修了生の日本語能力追跡調査班(三浦・島・古本・早川)が行った。
- 2) 文系理系別の分析の際は、非常に低い数値の「その他」が入ると検定ができなくなるため、「その他」を無答扱いとした。
- 3) 質問の詳しい内容については、添付資料(アンケート用紙)参照
- 4) 中にaとc、bとcという複数回答の例があった。これは集計上の便のため、無答扱いとした。
- 5) bの「指導教官がする」が、文系0、理系3と非常に低いため、検定ではcの「留学生と教官が共同でする」に含めた。
- 6) 今回の調査では留学生への指導だけを調査し、日本人学生への指導は調査しなかったため、こういう指導が留学生に与えられる特有のものであると断定はできない。日本人学生に対しても同種の指導が行われているであろうと筆者らは推測するが、日本語力の点で問題のある留学生に対する指導の方が、量的にも頻度の点でも多いであろうと考える。
- 7) しかし、この質問(17-1)に次ぐ自由記述回答(17-2)から以下のことが判明した。即ち、回答者の中

には視覚資料の「提示の仕方」ではなく、「作り方」を指導しているという意味で「指導している」を選択した人が、かなりの割合を占めていた(60名中28名、46.7%)。つまり、視覚資料に関して「作り方」を指導している人も「提示の仕方」を指導している人も、「指導している」と答えている。その上、設問の意味を正しく受け取って、「作り方」の指導はしているが「提示の仕方」の指導はしていないので、「指導していない」と答えた人もいるはずである。従って、得られた数字は正しくない。しかるに、質問17-1で得た数字は、視覚資料に関して「何らかの指導をしている」人の最低値を表していることは確かなので、敢えてここに数字を載せることにした。

- 8) 視覚資料の指導について記述があったのは、60人であるが、レジメのみを視覚資料として使いその作り方指導について記述している教官2人を除く58人について表を作成した。
- 9) 表15で*印の記述は同一人によるものであるから、理系が7人になる。

【参考文献】

- 越前谷明子編 (1996) 『第2回科学技術日本語教育協議会報告書—専門教官と日本語教官の相互理解をめざして』東京農工大学留学生センター
- 尾崎明人編 (1994) 『日本語研修コース修了生追跡調査報告書1994』名古屋大学留学生センター
- 尾崎明人編 (1996) 『日本語研修コース修了生追跡調査報告書2・1996』(文部省科学研究費基盤研究(B) 課題番号07458049), 名古屋大学留学生センター
- 尾崎明人編 (1998) 『研究留学生にみられる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究—日本語研修コース追跡調査報告書3—1998』(文部省科学研究費補助金基盤研究(B) (2)課題番号07458049), 名古屋大学留学生センター
- 化学同人編 (1994) 『若い研究者のための上手なプレゼンテーションのコツ』化学同人
- 産能短期大学日本語教育研究室編 (1990) 『大学生のための日本語』産能大学出版部
- 産能短期大学日本語教育研究室編 (1996) 『研究発表の方法』産能短期大学国際交流センター
- 庄司恵雄 (1994) 『大学院研究留学生の日本語使用実態に関する調査報告書』岡山大学
- 東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会編 (1995) 『日本語口頭発表と討論の技術』東海大学出版会
- 富山真知子・富山健 (1996) 『いざ国際舞台へ!理工系英語論文と口頭発表の実際』コロナ社
- 長田理 (1993) 『こんなに簡単! Macintosh—医学—統計マニュアル』真興交易医書出版部
- 仁科喜久子他 (1991) 『理工系留学生の日本語学習および能力に関する実態調査報告』東京工業大学
- 古本裕子・早川幸子・島弘子・三浦香苗 (1999) 「専門教育における留学生の口頭発表 (2) 使用言語について」『金沢大学留学生センター紀要』Vol.2
- 三浦香苗・深澤のぞみ・岡沢孝雄 (1997) 『5か月で口頭発表—1997 試作版』金沢大学留学生センター
- 三浦香苗・深澤のぞみ (1998) 「留学生の口頭発表に対する評価を探る—本当に伝えたいことが伝わるためにはなにが必要か—」『金沢大学留学生センター紀要』Vol.1, 1—15.
- 三浦香苗 (1998) 「初級段階の口頭発表プロジェクト—受信から発信へ—」平成10年度 日本語教育学会秋期大会予稿集, 日本語教育学会, 61—66.

"Guidance given to International Students regarding Oral Presentations in their Major Field of Study"

Kanae Miura, Hiroko Shima,
Yuko Furumoto and Yukiko Hayakawa

ABSTRACT The objective of this paper is to clarify the nature of advice given to international students by their academic advisors regarding oral presentations. A questionnaire sent to 194 advisors at Kanazawa University gained a response rate of 68.6% (133). The data was analyzed to see if there was a significant difference between students in the liberal arts (Group A) and sciences(Group B), and among faculties. The results are as follows. 1) The advisors recognize that the students' Japanese language proficiency is insufficient. 2) The advisors help their students in the following ways regarding language problems: (i)Advisors take initiative in choosing the theme, collecting reference materials, writing drafts and drawing charts/graphs. This help is notable in Group B. (ii)Advisors from both A and B check the Japanese in the drafts. (iii) Group B advisors check pronunciation at rehearsal. 3) For the most part, logic, accuracy, and time are checked at rehearsals. 4) Advice differs between Groups A and B: (i) in Group B advisors take initiative in choosing the theme, collecting reference materials, writing drafts and drawing charts/graphs. On the contrary, in Group A the advisor works more as a consultant and the students are allowed more initiative. (ii) Advisors in Group A tend to check the Japanese in the drafts, while Group B tend to have several rehearsals. 5) There is a significant difference among faculties in the selection, creation, and facility of visual aids. 6) 90% or more of the advisors in Group B had experience in making foreign language presentations. The figure for Group A was 50% or more. A number of advisors from both groups made conscious efforts to utilize their experience when giving advice to international students.

【資料】 専門の口頭発表についてのアンケート

このアンケートは良い口頭発表とはどのようなものか、また留学生が学会やゼミで口頭発表するとき、指導教官がどのように指導されているか、その時どのような問題があるのかを調査するものです。結果は今後の日本語教育に反映させたいと思っておりますので、ご協力お願いいたします。

なお、アンケートのデータは上記以外の目的で使用しないことをお約束いたします。また、このアンケート結果につきましては後ほどご報告させていただきます。

1. お名前 _____ 2. 学部・学科 _____ 3. ご専門 _____ (a.文系 b.理系 c.その他)
4. 留学生の発表言語 5. 指導の際の言語 (別表)
6. 留学生一人あたりの発表頻度と各発表についての持ち時間
 - 1) ゼミや演習 (① _____ 回/年 ②発表 _____ 分 ③質疑応答 _____ 分)
 - 2) 卒論・修論発表会をしますか。
選択肢：a. する (①時期は _____ 月頃 ②発表 _____ 分 ③質疑応答 _____ 分) b. しない
 - 3) 学会発表 (① _____ 回/年 ②発表 _____ 分 ③質疑応答 _____ 分)
7. (ゼミ以外の発表で) テーマの選択などは誰の裁量部分でしょうか。
 - 1) テーマの選択：
選択肢：a. 留学生の自主性に任せる b. 指導教官が与える c. 相談して決める d. その他
 - 2) 資料収集
選択肢：a. 留学生がする b. 指導教官がする c. 留学生と教官が共同です d. その他
 - 3) 原稿や図表
選択肢：a. 留学生が書く b. 指導教官が下書きを書く c. 共同で書く d. 留学生が書いて教官がかなり手を入れる e. その他
8. 発表の際の望ましい言語はどれですか。
①ゼミ・演習 () ②卒論・修論 () ③学会 ()
選択肢：a. 必ず英語で b. できれば英語で c. 英語・日本語どちらでもいい d. できれば日本語で
e. 必ず日本語で f. その他
9. 一般的によい内容の口頭発表に当てはまる項目を重要度の高い順に3つ選んでください。
1番 () 2番 () 3番 ()
選択肢：a. 問題点が要領よくまとめられている。b. 主張が明快である。c. 新しい発見がある。
d. 研究の意義をはっきり打ち出している。e. 内容が聞く人に正しく伝わるような発表である。
f. 内容が高度である。g. 内容の信頼性が高い。h. オリジナリティーがある。i. データ
収集の仕方がいい。j. 発表した内容について議論を誘うような発表である。k. わかりやすい。
l. 十分な勉強がされている。m. 構成がいい。n. よく準備されている。o. 視覚資料がわかりやすい。
p. 時間を守っている。q. その他

10. 口頭発表と論文に関して

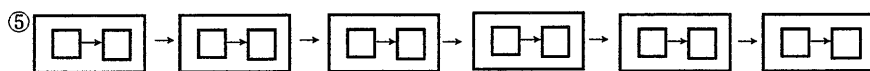
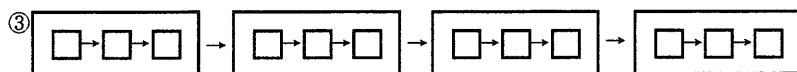
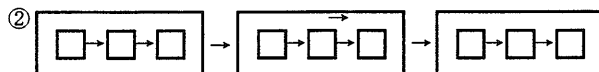
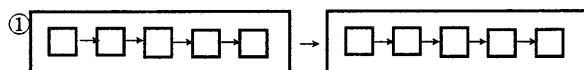
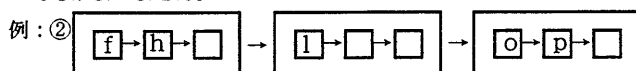
口頭発表は論文と比べてどこが違いますか。該当する項目を重要度の高い順に3つ選んでください。

1番() 2番() 3番()

選択肢：a.論文より論理展開をわかりやすくする。b.論文に比べて結論は早めに言う。c.最初に目的を言い、最後にまとめをする。d.ポイントを整理する。e.提出するデータを最小限にする。f.細かい説明を省く。g.「です・ます」体で話す。h.レジメだけ用意すればよい。
その他

11. 学会発表、卒論・修論発表の構成と時間配分

1) 学会発表、卒論・修論発表などに最もふさわしい構成を①～⑤のパターンから一つ選び、それぞれの枠に当てはまる項目を下欄から選んで、提出順に記入して下さい。一つの項目を複数回入れてもかまいません。



選択肢：a.序論 b.はじめに c.発表手順 d.問題提起 e.テーマ f.目的 g.背景 h.先行研究 i.本論 j.研究方法(実験・調査などの方法) k.実験手順 l.仮説 m.結果 n.考察
o.論証 p.結論 q.まとめ r.発表の意義 s.問題点 t.今後の課題 u.おわりに

2) 学会発表、卒論・修論発表の時間配分に典型的なパターンがあるとお考えの先生はその比率を書いて下さい。

(自由記述)

12. 発表のための原稿(レジメ以外)について

1) 発表原稿は必要でしょうか。

選択肢：a.必要 b.どちらでもよい c.必要ない

2) 「a.必要 b.どちらでもよい」と答えた先生に伺います。原稿は読み上げたほうがいいですか。

選択肢：a.読み上げた方がいい b.読み上げない方がいい c.どちらでもいい

13. 視覚資料について

1) 学会、卒論・修論発表、ゼミ別に、使用する視覚資料を記号で選んで下さい。

学会 (_ _ _) 卒論・修論 (_ _ _) ゼミ・演習 (_ _ _)

a. レジメ b. OHP c. スライド d. コンピューター e. その他 ()

2) 視覚資料を作成するにあたって注意する点を書いて下さい。

①レジメ (自由記述) ②OHP (自由記述) ③スライド (自由記述)

④コンピューター (自由記述) ⑤その他 (自由記述)

14. 練習回数と方法

*卒論・修論発表や学会発表をする学生を指導なさっている先生に伺います。

1) 発表の本番前の予行演習は本番1回に対して何回させますか。

選択肢: a. 0回 b. 1回 c. 2回 d. 3回 e. 4回 f. 5回以上

2) チェックしている項目は次のどれですか。(複数回答)

選択肢: a. 論理の展開の仕方 b. 内容に誤りがないかどうか c. 視覚資料のできれば d. 視覚資料の提示の仕方 e. 発表態度 f. 発音 g. 時間配分 h. その他

15. 発音・話し方に関して注意する点は次のどれですか。該当する項目を重要度の高い順に3つ選んで下さい。

1番 () 2番 () 3番 ()

選択肢: a. 全体的にゆっくり話す。b. 重要なところをゆっくり言う。c. はっきり区切って話す。

d. 普段とは発声や力の入れ方を変えて強い調子で話す。e. メリハリをつける。f. 聴衆を引き込むような話し方をする。g. 大きな声で話す。h. 個性を生かした話し方をする。i. 話しかけるように言う。j. 語尾をはっきり最後まで言う。k. 「語尾のぼし」など若者言葉を使わない。l. くれすぎた表現を使わない。m. その他

16. 発表態度

1) 発表態度で気をつけることがありますか。

選択肢: a. ある b. 特にない

2) *「ある」と答えた先生に伺います。どんな点に注意していますか。(複数回答)

選択肢: a. 相手の顔を見て話す。b. 下を見たり、外を見たりしない。c. リラックスした態度で話す。d. 適度の緊張を保つ。e. ポケットに手を入れない。f. ふらふら動かない。g. その他 ()

17. 視覚資料の提示について

1) 視覚資料の提示の仕方を指導していますか。

選択肢: a. 指導している b. していない。

2) *「a.指導している」と答えた先生に伺います。どんな点を指導していますか。

(自由記述)

18. 特に留学生に気をつけて指導している点は次のうちどれですか。(複数回答)

選択肢: a. リハーサルを行う。b. 本番の前に、原稿の日本語のチェックを受けるように言う。c. 易しい構文で話すよう指導する。d. 単純明快に話すよう指導する。e. 癖のある話し方をしないように注意する。f. 母語の影響によるなまりを注意する。g. 漢字の読み方の間違いを注意する。h. キーワード、専門用語の発音の間違いを注意する。i. 英語の発表では日本人にわかるように易しい言葉でゆっくり話すよう指導する。j. その他

19. 留学生の口頭発表を指導する際の問題点は次のうちどれですか。(複数回答)

選択肢：a.留学生は基礎力が不足している。b.留学生は統計やコンピューターの知識がない。c.留学生は英語力が不足している。d.留学生は口頭発表の経験が少ない。e.留学生は日本語力が不足している。f.その他

20. 外国語による発表について

1) 先生ご自身、外国語で発表なされた経験がありますか。

選択肢：a.ある b.ない

2) * 「a.ある」と答えた先生に伺います。

日本語による発表と外国語による発表はどんな点が違いますか。

(自由記述)

21. 留学生の口頭発表の指導について

1) 専門教官以外の者が協力することが可能でしょうか。

選択肢：.可能である b.可能ではない

2) * 「a.可能である」と答えた先生に質問します。次の誰が可能でしょうか。

選択肢：a.日本語教師 b.チューター c.院生やその他の学生 d.その他()

3) どんな協力が可能でしょうか。(複数回答)

選択肢：a.一般的なテーマで発表の練習をさせる。b.参考文献の探し方を指導する。c.日本語の原稿を直す。d.日本語の発音を直す。e.一般的な口頭発表の型を教える。f.発表に必要な日本語を教える。g.その他

22. 留学生のための口頭発表マニュアル作成について

1) 留学生のための口頭発表マニュアルは必要でしょうか。

選択肢：a.ぜひ必要 b.どちらかといえば必要 c.どちらかといえば不要 d.全く不要

2) * 「a.ぜひ必要 b.どちらかといえば必要」と答えた先生に質問します。

(1) どんなレベルの留学生を対象者としたマニュアルが望まれますか。

例：(ゼミなどで困難を感じるような日本語能力レベルの留学生) など

(自由記述)

(2) マニュアルにはどんな内容が盛り込まれるといいですか。(複数回答)

選択肢：a.発表で使う日本語表現 b.発表のための作文技術 c.一般的な構成 d.理系・文系別の構成 e.専門科目別の構成 f.発表態度 g.視覚資料の作り方の一般的な注意 h.視覚資料の提示の仕方 i.その他

23. その他、口頭発表に関して、重要な点・お気づきの点などありましたら、何でも結構ですから、

お書き下さい。

(自由記述)

ご協力ありがとうございました。